



きりん組

年中



虫好きの子も多いきりん組では、最近、テントウムシとカマキリが話題になっています。

子どもたちが見つけた幼虫を虫かごに入れておくと、数日後には蛹になったことから、注目が集まっているテントウムシ。「アブラムシを食べるんだよ」と虫に詳しいKくんが、家から持ってきたアブラムシをあげたり、園庭ではいろいろな子が「見つけたよ」「あそこにもいた!」と、幼虫を発見しては部屋に持ってきたりして、変化を楽しみにしています。最初に蛹になってから1週間後、ついに1匹目が羽化して、ナミテントウになりました。「本当にテントウムシになった!」「(図鑑と見比べながら)これだね!」と盛り上がり、「お外にかえす?」「え〜飼おうよ!」「ごはんあげないと」「次は何テントウかな?」と、いろいろな会話や呟きが聞こえてきます。その後も次々に羽化していて、毎朝登園すると



虫かごの周りに集まって様子を見ています。

テントウムシの変化と同時に、カマキリの卵からも赤ちゃんが生まれました。年少組のとき、夏みかんの収穫に行った際に見つけたカマキリの卵。「生まれるのが見たい!」ということで、きりん組と一緒に進級してきました。5月半ばのある日、「カマキリ生まれてる!」と登園した子が発見。小さなカマキリの赤ちゃんが4匹生まれ、「どこどこ?」と卵が入っている容器の中を覗き込む子どもたち。「いっぱい出てくるんだよね!」と楽し



みにしていましたが、その後は何故か全然生まれません。代わりに「何か黒い虫がいる!」と、卵の周りに小さな黒い虫が増えていきます。謎の虫を調べてみると、その名も「カマキリタマゴカツオブシムシ」というそうです。長くて不思議な名前に、一緒に調べた子たちも「なんとかブシムシ...?」と言っていました(ちなみにカマキリの卵に寄生する虫でした)。虫たちの変化から驚きや発見があり、まだまだ探究は続きそうです。

1カ月半が経ち、年中組での生活にも慣れてきた子どもたち。虫の他にも、電車作りや警察ごっこ、トイの道作り、お姫様ごっこなど、興味のあることや面白そうなことに集まり、動き出しています。(教諭・大塚美帆)





クラス くらす



たんぽぽ組 年少

園生活にもだいぶ慣れてきました。うわばきや靴に履き替えるのも、通園カバンのチャックを開けるのも、「できない!」「ひとりじゃやれないよー」という姿から、「できた!」「一人でやれたよ!」という姿に変わってきた子どもたち。

変わってきた……といえば、「〇〇ちゃんはどこ?一緒にあそびたいの」「〇〇くんと同じものが欲しいの」「〇〇マークの〇〇ちゃんは今日お休み?」など、身近に感じている子の名前が聞かれるようになったこと。そして同時に、「先生、見て見て!」「ちょっと来て!」と保育者を呼ぶ声が増えてきたことです。同じクラスの子や保育者のことがより身近になってきたということなのでしょう。

ある日のこと。「せんせい、ちょっと来て!」とAちゃんが呼びに来たので行ってみると、「今から髪の毛やさん、やるの」と言ってイスを並べ始めました。どうやってあそんでいくのか見ていると、ケープはままごと



用のエプロンで、シャンプーは箱積み木で、ブラシはフライ返しで代用してあそんでいます。近くにあるモノを使っているところが面白く、“楽しそう!”と興味を持った子が次々仲間に入りました。

別の日、丸形のボール紙に黒い紙をのりで貼ってせんべい作りをしていた時のこと。

網の上にのせて焼いているつもりであそんでいると、Bくんは赤いブロックを持ってきました。Cくんはままごと用のアイロンを持ってきました。Dくんは「たいようはどこだ?」と言いながら、陽の当たる場所にせんべいをのせた網を移動させました。

3人の思いは同じ。どうやってこのせんべいを温めるか…を真剣に考えていたのです。

人が集まる場所には、自分では思いつかない考えに触れる楽しさがあります。

今、だれかがしていることに、「何しているのだろう」「おもしろそう!」と寄り集まり、新しい楽しさに出会っている、たんぽぽ組の子どもたちです。

(教諭・阿部和香子)





研究室から

高度情報化時代が進む、 教育での ICT 活用

橋本陽介

白梅学園大学准教授



パソコンやタブレット端末、スマートフォン、インターネットなど、情報通信技術(ICT)の活用は、私たちの暮らしに、より身近となり、なくてはならない存在となっています。私の研究室では、そのICTを教育(とりわけ特別支援教育)で、どのように活用するとよいかをテーマの1つに、活動に取り組んでいます。

私が初めて取り組んだICTの活用に関する研究は、“インターネットを利用した連絡帳のやり取り”です。この研究を通し、保護者の皆様にとって連絡帳は、非常に大切なツールであることを実感しました。なぜなら、連絡帳は、担任の先生と保護者との間で、子どもの日々の様子を最も詳しく共有できるツールであるためです。さらに、幼児期の連絡帳は、子どもの成長記録として、長期間、大切に保管されている保護者も多いです。また、私の取り組んだ研究では、実際にインターネットを利用して連絡帳をやり取りすることで、子どもの日々の様子を、一歩進んだ形で共有できることがわかりました。白梅幼稚園のホームページでも、日常の様子が発信されており、現在では、子どもたちの成長とその喜びを共有する上で、ICTは重要な役割を果たしていると感じています。

一方、近年では、高度情報化時代の中、子どもたちの教育活動でも、ICTが重要な役割を果たすこととなりました。特に最近では、文部科学省が「GIGAスクール構想の実現」を加速させたことで、児童生徒に1人1台端末が配布されるようになりました。従って、これからの時代は、パソコンやタブレット端末も、教科書やノートと同じように、使って当然の教具となっていくと考えられます。

パソコンやタブレット端末での学習には、すぐに正誤がわかる、繰り返しの学習がしやすい、他者と考えが共有しやすいなど、利点がたくさんあります。また、わからない問題やじっくり考えたい問題は、それだけを選択しておくことができ、あとからじっくり回答したり、それらの蓄積から自分の苦手な傾向を把握できたりします。就学後の学習をスムーズに進めるためにも、幼児期から端末に慣れ親しみ、活用への抵抗感を減らしてゆくことが重要になると思います。幼児期から少しずつ正しい使用方法が身に付き、高度情報化時代の教育の中で、子どもたち1人ひとりの可能性がさらに広がっていくことを願っています。



にじ組

預かり保育

「おかえりなさい!」「ただいま!」。

幼稚園の教育時間が終わると、各クラスから続々とにじ組の子ども達がにじ組のお部屋へ“帰って”きます。工作や虫、草花など、お土産を片手に帰ってくる子どももチラホラ…。

子どもは入室するとまず着替えをして気持ちを切り替え、横になって体を休めます。4月入園の年少組もだいぶスムーズに着替えられるようになりました。



15時はお楽しみのおやつ時間です。「今日は何のお菓子かな?」。眠い目をこすりながら起きてきます。年長組はなかなか目が覚めない小さい子を優しくトントンと起こしたり、大きなタオルをたたむのを手伝ってくれたりします。



そして、おやつを食べ終わるとそれぞれ好きな遊びへ向かいます。大きなブロックを積み重ねて壁を作り、できあがったおうちの中でのんびりしたり、ままごとコーナーではパーティーが始まり「かんぱーい」という元気な声が聞こえてきたりします。一方では黙々とレールをつなげて数人で電車を走らせたり、1冊の図鑑を4、5人の友だちと一緒に見たり…クラスや学年の垣根を越えて遊ぶ姿が見られます。大人数の時は園ホールも使って遊びます。年長組が広いスペースを思う存分に使ってカプラや井形ブロックを積み上げたり、レールを長くつなげたりしてダイナミックに遊んでいます。

夕方には一度みんなで集まります。そこでお名前呼びをして、絵本を見ながら静かに過ごすこともあります。

このように、にじ組の生活も2か月が経ちました。慣れてきたところで園庭にも出て遊ぶ時間もちます。また、長期休みには学内をお散歩したり、夏休みには水遊びをしたりして遊びます。



降園時間はそれぞれになります。お迎えにいらした保護者の顔を見て、笑顔になる子、照れてはにかむ子、時には遊びに夢中で「まだ遊びたい!」と言い出す子も。子どもと保護者の方の安心された姿を見て、私たちスタッフもホッとします。

このにじ組が子ども達一人ひとりにとってホッと安心できる場所でありたいとスタッフ一同願いながら過ごしています。
(教諭・玉井三津)

保護者から



年長組
坂井さん

上の子2人に続き、三男も今お世話になっています。にじ組では、他学年の顔なじみができたり、家にはない役目や遊びもあり、貴重な経験ができると思います。また、育児経験も豊富な先生方が様々な育児不安に優しく助言して下さり、子どものみならず親も育ててもらったと感じています。

にじ組にお迎えに行くと遊びの豊富さに驚きます。クラスで流行の警察ごっこは宝探しに発展。同じ素材を使って年齢別の遊びをしていたり(ex.毛糸の指編みなど、娘は年上への憧れを強めています)、ホールでゲームをしていたり、洗濯ばさみでドレスを作ったりもしていました。

先生と一緒に一番星を見ていることもありました。

〈子どもが好き〉という気持ちを持った先生方が、子どもの様子に合わせて丁寧に関わってくださっていることが伝わります。娘の心が満たされているおかげで、安心して働けます。日々感謝しています。



年中組
福川さん